

変わりゆく移住の形式

—よそ者 (stranger) 概念からみる「新しい移住」—

須藤直子

1. はじめに

(1) 本稿の目的

本稿は、都市から係累のない地方へ移り住むIターン¹を「新しい移住」と位置づけ、よそ者 (stranger) 概念から「新しい移住」を担う主体を検討することで、移住の形式がいかに変容しているのかを考察する。

戦後、高度経済成長期の日本では、労働力移動を中心とした地方から都市への移動が主流であった。1960年代は非大都市圏から大都市圏への移動が全体の移動の3割強を占めていたが、1970年代に都市化が進み、郊外社会が形成されると、大都市圏内での移動が全体の移動の3割から4割弱を占めるようになる²。この傾向は2000年代以降も続いている。しかし、1989年に係累のない土地へ移り住むことを指すIターンという用語が長野県によって打ち出されたことで、大都市圏から非大都市圏への移住が注目されるようになった。出身地へ戻ることを示すUターンと同様に、Iターンという用語はすでに定着しつつあり、今日では都市住民が田舎暮らしやスローライフというような地方での生活を選びとることとセットにして語られる。さらに、2000年代に入ると、国や地方公共団体が主導する都市から地方への移住を促すさまざまな政策が登場し、Iターンは制度化されるようにさえなっている³。

以上のようなIターンの出現は、日本において「新しい移住」が出現したこと意味する

¹ 「長野県出身であるか否かにとらわれず『I』の字のように一直線に信州に来てほしい」という思いから、長野県が東京・大阪・名古屋に「Iターン相談室」を設置したことが始まりとされる (菅 2006: 5)

² 総務省統計局『住民基本台帳人口移動報告年報』のデータから国立社会保障・人口問題研究所がまとめた類型別府県間移動数 (国立社会保障・人口問題研究所 2011) をもとに、筆者が割合を算出した。各類型別移動数/全移動数×100によって類型別移動の構成比を計算している。大都市圏とは以下の三大都市圏を示している。①東京大都市圏: 東京、埼玉、千葉、神奈川、②名古屋大都市圏: 岐阜、愛知、三重、③大阪大都市圏: 京都、大阪、兵庫、奈良。

³ 1980年代の後半には、竹下内閣によって「ふるさと創生論」が打ち出され、一億円のふるさと創生基金を用いながら町づくりや村おこしを行うことが全国の市区町村に推進された (安井 2000: 95)。しかし、この当時は観光地の整備や特産物の開発などに力が注がれていた。すなわち、1980年代後半から「ふるさと」や「田舎」への関心が高まっていたことは事実だが、外部から移住者を募ることで町づくりを行う視角はまだあまり見られなかったといえる。

だろう。なぜなら、Iターンは都市から地方への移住であるが、1960年代から70年代の農村にコミュニティを形成するような「思想的参入」や、1980年代以降の有機農業への関心における「ライフスタイル的参入」(秋津 2002: 129-32)という文脈からは理解できない移住だからである。菅康弘は、Iターンを「肩肘はった『骨を埋める』覚悟の移住でもなく、地域から隔絶し独自の生活や共同体を追及する移住」ではない、と述べる(菅 2006: 16-7)。すなわち、Iターンは、移住動機においても、また移住の形式においても、これまで観察されてきた都市から地方への移住とは区別されるのである。そこで、本稿ではIターンを1990年代に生まれた「新しい移住」としてとらえる⁴。

では、「新しい移住」を担う主体とは、どのような特徴を持っているのだろうか。また、移住をサポートするような移住政策を利用して移住するとはどういうことなのか。そして、移住先の地域において、彼らはどのように位置づけられているのか。本稿では、従来のよそ者概念を参照し、「新しい移住」を担う主体がどのような存在であるかを検討する。そして、日本国内における移住の形式がいかに変容しているのかを考察する。

(2) 対象と方法

本稿の対象と研究方法について示しておこう。まず、「新しい移住」を担う主体を分析する枠組みとして、よそ者概念の整理を行う。ここでは、よそ者についてそれぞれ異なる水準から言及していたゲオルグ・ジンメルとアルフレッド・シュッツの論考を取り上げ、彼らがどのようによそ者を位置づけていたのかを検討する(2章1節および2節)。そして、ジンメルとシュッツのよそ者概念をふまえながら、より空間を拡張してよそ者をとらえた赤坂憲雄の〈異人〉の類型図式を提示する(2章3節)。そして、3章以降では、1990年代以降の日本国内における「新しい移住」を担う主体が、2章で整理したよそ者概念からいかにとらえることができるかを検討していく。赤坂による〈異人〉の類型図式を下敷きに、「新しい移住」を担う主体が図式のどこに位置するのか、またその類型から説明できな

⁴ 筆者はこれまで、1990年代以降に沖縄県外(本土)から沖縄へ移り住むという「沖縄移住」に着目し、その移動がいかにして行われているのかを検討してきた。沖縄への移住者は、生き方や価値観の変化を強く希求することで、その変化を可能にする一つ的手段として沖縄への移住を選択していたが、一方で移住者によって沖縄の「場所性」が固定化されていくという事態が起きていた。これを、「現代の新しい『移住』は、生き方や自己の変化を希求する個人が、再固定化された都市-地方という関係性の中で移動するという事態」と論じた(須藤 2011: 76)。また、1990年代以降、海外に長期滞在する日本人が増加しているが(外務省領事局政策課 2009: 9)、その中で従来の海外移民のように、新天地に就労機会を求める移住や、企業の駐在員としての移住では説明できない移住が現れている。それは、「ライフスタイル移民」として概念化されている(Sato 2001; 山下; 2007など)。島村麻里によれば、ライフスタイル移民とは団塊の世代による留学などを含む、語学や習い事といった趣味を優先することで海外移住を選択する人々である(島村 2007: 96-98)。吉原は、パリに住む日本人を分析する中で、彼らの特徴を「他の国とか地域でみられるような日本企業の海外進出と直接にむすびついた移住者(『企業移民』)ではなく、「中高年女性とか定年退職者を担い手とする『ライフスタイル移民』」であると述べている(吉原 2008: 204)。そして、ライフスタイル移民は「古典的な移民という枠ではとらえられず、もう一つの人生を求めるタイプ」の移住である(山下 2007: 8-9)。このようなライフスタイル移民も、「新しい移住」の一つである。

いのだとすればそれはなぜなのか、考察を行う。

「新しい移住」を担う主体として取り上げるのは、2タイプである。一つは、①2000年以降に北海道が行う移住政策を利用した人びとである。2000年以降、日本国内では都市から地方へと人を誘致するさまざまな政策が開始されたが、北海道は移住に関する豊富な政策プランを持ち、ここ数年で実績をあげている地域である。これらのプランを利用して移住を選択する人びとは、赤坂による〈異人〉の類型の二つのカテゴリーを同時に引き受けようとする存在であることを示していく(3章)。用いるデータは北海道総合政策部地域づくり支援局が発行している『満喫暮らし北海道 GUIDE BOOK』および北海道移住促進協議会が発行している『北海道移住案内 2011「ちょっと暮らし」ガイド』に掲載されている移住政策とその利用者の語りである。二つ目は、②過疎化が進み、県外への若者の流出が激しい集落において、その流出した若者の存在を補うように地域住民となっていく移住者を取り上げる。ここでは、2008年の5月から7月にかけて筆者が行った沖縄移住者を対象にしたインタビュー調査のうち、沖縄県北部に在住している本土出身の夫婦の語りを取り上げる。彼らは地域に不可欠な存在となりながらも、実はマージナルマンであり続けるという姿をとらえる(4章)。結論では、本稿で取り上げる上記の2タイプが、日本国内における移住の形式の変化を示していることを指摘する(5章)。

2. よそ者概念について

本節では、これまで議論されてきたよそ者概念について整理する。よそ者については、移民研究などの分野をはじめとして、適応や同化という視点から多くの業績がある。しかし、本節で取り上げるよそ者概念は、空間や集団へのよそ者の「接近の仕方」から考察したものであり、ゲスト側に立脚しているといえる。はじめにジンメルの異郷人の議論について触れたあと、シュッツの他所者概念を整理する。そして、二人の概念を参照しながら、〈異人〉の類型をまとめた赤坂憲雄の見解を提示する⁵。

(1) ジンメルの異郷人

ゲオルグ・ジンメルは、『社会学』(下)(1908=1994)において、「異郷人についての補説」をおさめている。そこで論じられた異郷人の特徴をまとめることで、ジンメルがとらえたよそ者の輪郭を浮かび上がらせてみたい。

ジンメルは、異郷人という形式が、放浪と定着という「二つの規定のいわば統一をあらわしている」とし、以下のように説明している。

(前略) 異郷人は、これまでにしばしばふれた意味において、今日訪れ来て明日去り行く放浪者としてではなく、むしろ今日訪れて明日もとどまる者—いわば潜在的な放浪

⁵ 本稿で取り上げるよそ者概念の「よそ者」の原語は、すべて **stranger** (ドイツ語では **Fremden**) である。しかし、訳者によって、よそ者の日本語表記は異なっており、ジンメルのよそ者は異郷人、シュッツのよそ者は他所者である。それぞれのよそ者概念に言及する際は、訳者の表記に従い、本稿でも異郷人や他所者とした。また、赤坂は一貫してよそ者を〈異人〉に統一しており、赤坂の論考に言及する際は〈異人〉という表記に従った。

者、旅は続けはしないにしても来訪と退去という離別を完全には克服していない者なのである。異郷人は一定の空間的な広がり—あるいは、その境界規定が空間的なそれに類似した広がり—の内部に定着してはいるが、しかしこの広がりの中における彼の位置は、彼がはじめからそこへ所属していないということ、彼がそこには由来せず、また由来することのできない性質をそこへもたらすということによって、本質的に規定されている (Simmel 1908=1994: 285)。

ジンメルは、異郷人が一定の空間の内部へ定着していることを示しながら、その空間の広がりには由来せず、決して由来できない性質をもたらすと述べる。そして、いわゆる放浪者と土着の者の両方の性質を引き受ける「放浪と定着の統一体」として異郷人をとらえている。放浪と定着を対立概念として明確に区別しながら、しかしその両方の性質を引き受けるという、両義性をはらんだ存在として理解しているのである。また、異郷人は「集団そのものの要素である」とし、「集団の成員としては、関係がたんに一般に人間的な同質性に基礎を置くばあいと同じように、近くもあれば同時にまた遠くもある」と述べている (Simmel 1908=1994: 286-90)。すなわち、ジンメルは、空間や集団との関係性から異郷人をとらえる中で、空間や集団の「内部—外部」という区別を設定しながら、そのどちらかに異郷人を位置づけるのではない。内部にいながらにして外部の性質をも併せ持つような人間であるととらえているのである。

(2) シュッツの他所者

次に、アルフレッド・シュッツによる「他所者 (ストレンジャー)」概念についてみていく。先に取り上げたジンメルとは、よそ者をとらえる視角が異なっている。ジンメルとの相違点を指摘しながら整理していこう。

シュッツは、『現象学的社会学の応用』(1964=1980)の第一章で、「他所者—社会心理学の一考察—」を取り上げている。シュッツは他所者を以下のように記述する。

他所者とは、私たちの生きるこの時代、この文明に属する成人した個人を意味し、かれが接近する集団に永久的に加入するか、少なくともその集団に許容されようとする立場にいる人を指す (Schutz 1964=1980: 3)。

シュッツの上記の他所者の定義には、具体的に「閉鎖的クラブへの加入者」や「田園地方に移住する都市移住者」などが含まれるとし、「(a)集団と単に一時的な接触だけを持つつものの訪問者や客人、(b)子供や未開人、(c)ヨーロッパに連れてこられたヒューロン族」は、上記で定義された他所者からは「意図的に」除外する、と述べている (Schutz 1964=1980: 3-4)。すなわち、シュッツが想定する他所者とは、ある成人した個人が、それまで属していた集団から、ある別の集団へ永久的に、または継続的に所属していくことであり、「その(新しい)集団に許容されようとする」ことを前提にしている。この説明は、ジンメルのとらえた異郷人とはよそ者をとらえる水準が異なっているといえるだろう。ジンメルは、異郷人を「放浪と定着の統一体」として捉えたように、放浪と定着の両方の性質を引き受

けながら、集団の要素であると説明した。しかし、シュッツの他所者の定義は、接近する集団に対して「許容されようとする」態度を示す者であり、集団への帰属を求める存在である。すなわち、シュッツのとらえる他所者は、集団への帰属という「意思」によそ者の定義を求めている点で、ジンメルのもそれよりも狭義であるといえよう。菅は、このような両者のよそ者の捉え方の違いを、次のようにまとめている。

ジンメルのもよそ者は集団と一定の距離をとり、そのスタンスに不安感は少なく自律的である。逆にシュッツのもよそ者はやや悲哀的である。そのスタンスは、受け入れてもらうこと、認められることを願って止まない、他者からの認証を求める態度に等しい（菅 2006: 10）。

確かに、シュッツの他所者は「帰属の意思」から定義されている点で「悲哀的」なのかもしれない。しかし、シュッツが他所者を集団に対して「許容されようとする」態度から説明するのは、内集団によって獲得してきた「集団生活の文化的パターン」が関係している。「集団生活の文化的パターン」とは、「(フォークウェイズ、モーレス、法、習慣、風習、礼儀作法、流行などの) 固有の価値判断、制度、方向づけと指針の体系」である (Schutz 1964=1980: 4)。この文化的パターン、さらに知識の体系は、本来同質的ではないにもかかわらず、内集団においては互いに理解することが可能であることから、集団の内部で伝えられた文化的パターンの図式は、「疑問の余地のない指針」として受け入れているという (Schutz 1964=1980: 6-9)。これをシュッツは「日常的思考 *thinking as usual*」と呼ぶが、新たな環境や集団になると、それまで自分の習慣となっていた「日常的思考」の妥当性への信頼を、突如揺るがすことになる (Schutz 1964=1980: 13)。つまり、他所者は、新しい環境へ接近しようとするとき、自らの文化的パターンや知識ではその環境を理解することができず、さまざまな齟齬を経験することになる。そのため、シュッツはそれまで決して疑うことがなかった文化的パターンを問い直すという営みに遭遇する存在として他所者をとらえている。接近する集団に対して「許容されようとする」態度から他所者を説明した理由がここにあるといえる。

以上、ジンメルとシュッツにおけるよそ者の概念を整理した。ジンメルもシュッツも、ゲスト側に立脚してよそ者を解釈している。しかし、ゲストの「何」に立脚するかによって、両者の解釈が異なっていることが明らかになった。すなわち、ジンメルは接近する空間や集団に「留まるか否か」という水準から、シュッツは「成員になるか否か」という水準からよそ者をとらえたのである⁶。

⁶ 佐藤郁哉は、ドナルド・ルバインによるよそ者の解釈 (Levine 1977) を「異人関係の類型」としてまとめている。ルバインは、ジンメルとシュッツと異なって、ホスト側からよそ者の位置付けを記述している。類型は、「異人に対してホスト社会が好意をもって対応するか (+) 敵意をもって対応するか (-)」という点と、「異人がホスト社会に寄留する目的が、ただの訪問であるのか、そこに住みつくことにあるのか、それともメンバーの一人となることにあるのか」という二つの軸から整理されている。①ただの訪問である場合、(+) はゲスト、(-) は侵入者である。②住みつく場合は、(+) は寄留者、(-) は内なる敵である。③成員になろうとする場合は、(+) が新参者、(-) がマージナルマンである (佐藤 2006: 166-7)。

(3) 赤坂憲雄の異人論

前節まで、ジンメルとシュッツにおけるよそ者概念をみてきた。本節で取り上げる赤坂憲雄は、『異人論序説』（1992）の中で、ジンメルやシュッツがとらえるよそ者をふまえながら〈異人〉の類型化を行っている。しかし、赤坂の異人の類型は、ジンメルやシュッツのそれよりかなり広範囲で多義的である。

赤坂は、〈異人〉というカテゴリーを、「共同体と外部の〈交通〉の視角から、〈漂泊〉と〈定住〉の形式によって分類する」と述べる（赤坂 1992: 18）。ジンメルが放浪と定住を対立概念として捉えたように、赤坂も〈漂泊〉と〈定住〉を対概念として捉え、「〈異人〉はわたしたちにとって、遠／近の両義的なありかたをしめす人びと、いわば〈漂泊〉／〈定住〉のはざまに生きる人びとである」と解釈する（赤坂 1992: 18）。では、赤坂は異人をどのように分類したのか。以下、表 1 にまとめた。

表 1 赤坂による〈異人〉の分類（赤坂 1992: 18-9）

①一時的に交渉をもつ漂流民	サンカ・遊牧民・浮浪民・日本中世の遊行聖・遍歴職人・土着以前の行商人・遊女・小屋掛けの芝居一座・遍路乞食など
②定住民でありつつ、一時的に他集団を訪れる来訪者	行商人・旅人・巡礼・赴任先の学校教師・海外派遣の商社マンや宣教師・疎開地の都会っ子など
③永続的な定着を志向する移住者	移民・亡命者・他部落からの婚入者・嫁・養子・継子・継母・地域社会への転入者・転校生・閉鎖的なクラブへの入会志願者・新生児など
④秩序の周縁部に位置づけられたマージナル・マン	狂人・精神病者・身体障害者・非行少年・犯罪者・変人・怠け者（労働忌避者ないし不適格者）・兵役忌避者・売春婦・性倒錯者・病人・アウトサイダー・異教信仰者・独身者・未亡人・孤児など
⑤外なる世界からの帰郷者	帰国する長期海外滞在者・故郷へかえる出稼ぎ者・復員兵・海外帰国子女・“帰国後のロビンソン・クルーソー”・発見された旧日本兵
⑥境外の民としてのバルバロス	未開人・野蛮人・エゾ・アイヌ・土蜘蛛・隼人・山人・鬼・河童など

赤坂は、ジンメルやシュッツよりも〈異人〉Stranger を広義に解釈し、上記表 1 のように六つのカテゴリーから〈異人〉を解釈している。ジンメルの異郷人やシュッツの他所者に含まれなかった①漂流民や②来訪者を赤坂が含んでいるのは、〈漂泊〉や〈定住〉という対概念を、「共同体の内／外を往還する運動の軌跡であり、そこにたえまなく生起する〈交通〉の物語」としてとらえるからである（赤坂 1992: 18）。さらに、赤坂は、〈異人〉を関係概念であるとして、以下のように述べている。

〈異人〉とは実態概念ではなく、すぐれて関係概念である。〈異人〉表象＝産出の場
 にあらわれるものは、実態としての〈異人〉ではなく関係としての〈異人〉、さらにい
 って〈異人〉としての関係である。ある種の社会的な関係の軋み、もしくはそこに生じ
 る影が〈異人〉である、といってもよい（赤坂 1992: 21）。

〈異人〉を実態概念ではなく関係概念ととらえることで、社会に隠ぺいされた制度が顕
 在化する、と赤坂は述べる（赤坂 1992: 22）。人間は、内集団への帰属を確認するために、
 秩序の周縁部に「否定的なアイデンティティを体現する他者」を必要とし、それが「異質
 な他者」としての〈異人〉であるというのである（赤坂 1992: 22）。すなわち、赤坂は「〈漂
 泊〉と〈定住〉のはざまに生きる者」、また「秩序の周縁部に追いやられた者」という二つ
 の水準から〈異人〉を解釈していることで、〈異人〉の類型がジンメルやシュッツのそれよ
 りも広義で多義的なのではないだろうか。

以上が、赤坂による〈異人〉の解釈である。以下図1は、赤坂が分類した六つのカテゴ
 リーの〈異人〉の類型を赤坂が図式化したものである。次章より、この図式を用いて、日
 本における「新しい移住」を担う主体を分析していく。

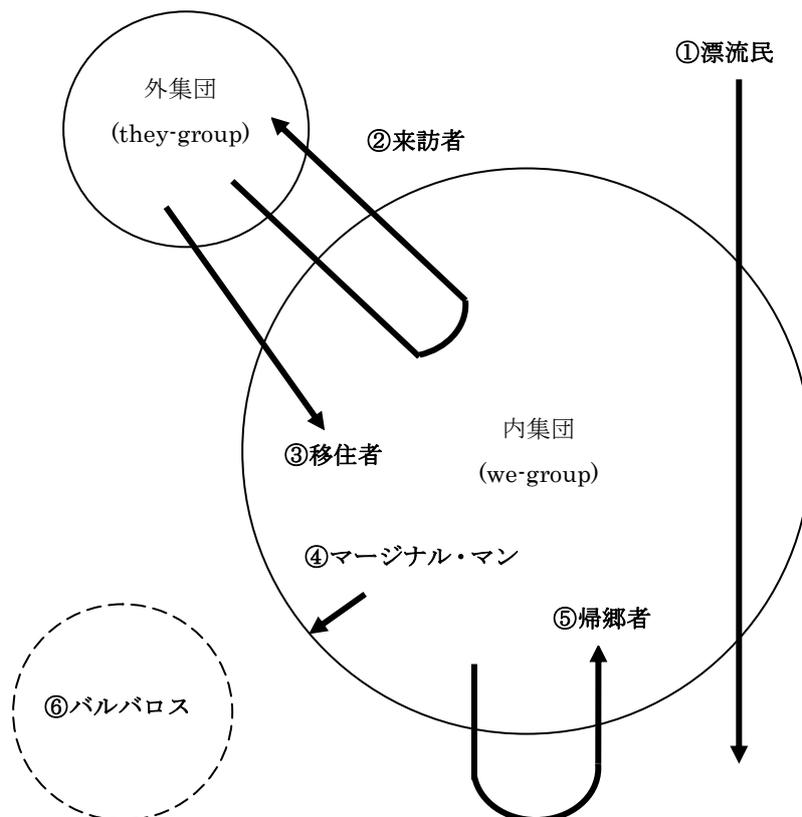


図1 さまざまな〈異人〉 (出典：赤坂 1992: 20)

3. 来訪者と移住者の二重性

本章より、「新しい移住」を担う主体がどのような存在であるかを検討していく。前章で整理したよそ者の概念を用いて、彼らの性質を説明していく。本章で取り上げるのは、2000年以降に北海道が行う移住政策を利用した人びとである。

(1) 2000年以降の移住促進事業の概観

北海道の事例を取り上げる前に、2000年代にはじまった総務省による移住支援や促進事業の取り組みを概観しておこう。

まず、2008年に「地域力創造プラン」（通称、鳩山プラン）が立ち上がった。鳩山プランは、「人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域力の維持・強化を図るためには、担い手となる人材の確保が特に重要な課題」となっている一方で、「豊かな自然環境や歴史、文化等に恵まれた地域で生活することや地域社会へ貢献すること」に対するニーズが団塊の世代や若者層の都市住民の間で高まっていることを背景に打ち出された政策である⁷。そして、「地域連携による『自然との共生』の推進」を図ることの取り組みの一つに、地域おこし協力隊がある。地域おこし協力隊とは、「3大都市圏をはじめとする都市圏の住民が、概ね1年以上3年程度、地域で生活（住民票を移動）し、農林漁業の応援、水源保全・監視活動、住民の生活支援などの各種の地域協力活動に従事する者」である⁸。「人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に誘致し、その定住・定着を図ることで、意欲ある都市住民のニーズに応えながら、地域力の維持・強化を図っていくこと」を目的にした取り組みである⁹。そして、地方自治体は「地域おこし協力隊推進要綱」に基づいて地域おこし協力隊の採用を行う場合、この取り組みにかかる経費について、隊員1人あたり350万円程度（報償費等については200万円程度）を上限とする特別交付税措置が行われる。また、地域おこし協力隊は「定住自立圏構想」と大きく関連している。2009年（平成21年）4月から全国展開されている定住自立圏構想とは、「地方圏において安心して暮らせる地域を各地に形成し、地方圏から三大都市圏への人口流出を食い止めるとともに、三大都市圏の住民にもそれぞれのライフステージやライフスタイルに応じた居住の選択肢を提供し、地方圏への人の流れを創出すること」を目的としている¹⁰。定住自立圏構想の対応地区とされる地方自治体に、地域おこし協力隊が派遣される事例が多い。

以上のように、鳩山プランを軸としながら、現在地域おこし協力隊は活発に活動を行っている。2010年（平成22年）11月1日時点における『平成22年度 地域おこし現況調査』では、2010年度における地域おこし協力隊員の人数は230人で、うち184名がIターン者

⁷ 総務省，2009，「地域おこし協力隊推進要綱」，（2011年8月29日取得，http://www.soumu.go.jp/main_content/000035200.pdf）。

⁸ 総務省地域力創造グループ人材力活性化・連携交流室，2010，『平成22年度 地域おこし協力隊の現況調査の結果』総務省。

⁹ 総務省，2009，「地域おこし協力隊推進要綱」，（2011年8月29日取得，http://www.soumu.go.jp/main_content/000035200.pdf）。

¹⁰ 総務省ホームページ「地域力の創造・地方の再生「定住自立圏構想とは」」（2012年1月23日取得）http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/kenkyu/teizyu/index.html。

であった¹¹。この隊員の人数は、前年度の 89 人と比較すると二倍以上である。また、総務省が行っている移住政策のほかに、農林水産省の「田舎で働き隊！」事業がある¹²。

では、次節では具体的な北海道の移住政策をみていこう。2000 年以降、積極的な移住政策を行う地方自治体が増える中で、北海道は特に充実した政策プランと実績をもっている。その移住政策の利用者はどのような特徴をもっているのだろうか。先に論じたよそ者概念から検討してみよう。

(2) 「北海道移住」と平成の屯田兵

北海道は歴史的に道外からの開拓民によって発展した土地である。1868 年に江戸幕府が倒れ、新政府が発足すると、それまでの蝦夷地は北海道と改称された。1869 年（明治 2 年）に開拓使が設置され、1875 年（明治 8 年）に屯田兵制度が導入される。最初の屯田兵は、宮城、青森、山形の三県および道内からの応募者 198 戸で、彼らが琴似兵村へ移住した最初の屯田兵であった（桑原 1985: 34）。その後、1890 年（明治 23 年）には平民からも屯田兵を採用するようになり、1904 年（明治 37 年）に屯田兵条例が廃止されるまでおよそ 30 年間屯田兵は続いた。また、農民（民間人）が北海道の殖民として開拓事業に関わっていくが、1890 年代には移住勧誘事業として、北海道の新聞記者が日本全国を移住勧誘のために縦断したという記録が残っている（中村 1998）。すなわち、東北地方をはじめ、全国から集められた人びとによって北海道は形成されたといえよう。そして、2000 年代、新たに道外から北海道へ向かう人たちの存在が観察されている。このような「平成の屯田兵」（中村 1998: 210）は、どのようなルートで、どのような動機で北海道を目指すのだろうか。

本節で取り上げるのは、2005 年に設立した北海道移住促進協議会¹³と、2006 年に発足した NPO 法人住んでみたい北海道推進会議によって進められている移住政策である。両者は強い連携をはかりながら、道外からの移住者を積極的に募集している。北海道総合政策部地域づくり支援局が発行している『満喫暮らし北海道 GUIDE BOOK』および北海道移住促進協議会が発行している『北海道移住案内 2011「ちょっと暮らし」ガイド』に掲載されている移住政策とその利用者の語りを用いながら、新しい「北海道移住」を担う主体を考察する。

北海道が進めている移住政策は、大きく四つの移住のタイプに分けられる。それは、①「ちょっと暮らし」（お試し移住）、②シーズンステイ、③二地域居住、④完全移住である。この四つの移住の中で、①「ちょっと暮らし」の利用者は年々増加している。「ちょっと暮らし」とは、「住んでみたいと思う地域に、まずは体験移住し、地域の自然や生活環境、受け入れ体制などを確かめる」ものであり（北海道総合政策部地域づくり支援局 2009）、2006

¹¹ 総務省地域力創造グループ人材力活性化・連携交流室、2010、『平成 22 年度地域おこし協力隊の現況調査の結果』総務省。

¹² 総務省や農林水産省のような省庁主導の移住政策だけでなく、各都道府県が積極的に情報提供を行っている。2012 年 1 月現在、埼玉県、東京都、神奈川県、大阪府、福岡県の 5 都府県を除いた 42 道府県が、移住に関する県独自のホームページを開設したり、移住の相談窓口の案内を掲載したりしている。

¹³ 北海道移住促進協議会には、北海道 179 市町村のうち、98 市町村が加盟している（2011 年 12 月現在）。

年度（平成 18 年）からはじまった。初年度の利用者は 417 名で、19 年度は 616 名、20 年度は 803 名、そして 2009 年度（平成 21 年）には初年度の三倍の 1159 名である。平均滞在日数は 24.6 日で、利用者の 8 割が 50 代から 70 代の中高齢層である¹⁴。

この「ちょっと暮らし」の制度は、1990 年代以降の沖縄への移住を、沖縄ブームや沖縄観光との接点から説明する視角があったように、観光という視点からみることができるだろう。例えば、多田治は「マス・ツーリズム型の駆け足観光では物足りない」人々が、半年に一度沖縄にロングステイをしたり、沖縄の安宿に長期で滞在したりするようになることで、観光と移住とがなだらかにつながるようになったと述べる（多田 2008 : 234-5）。また、秋山道宏も「従来、移動の側にあると見られてきた観光は、移動性の高まりによる観光の延長としての移住という現象の出現によって、住まい方・居住のあり方と密接に関連してきている」と述べる。そして、沖縄への移住を「住む観光としての移住」として説明している（秋山 2009 : 61-3）。すなわち、沖縄と同様に観光地でもある北海道が提供する「ちょっと暮らし」を、長期滞在型の観光としてとらえることも可能ではないのか。しかし、北海道の「ちょっと暮らし」は、「道内への本格移住を検討する人に数週間から数カ月間、空き家や専用住宅を提供して住んでもらう事業」¹⁵である。用意されているプログラムも観光にかかわるものではなく、その地域で暮らすための体験プログラムである。つまり、「住む観光としての移住」ではなく「住むための移住体験」なのである。

さらに、②シーズンステイと③二地域居住は、この「ちょっと暮らし」を拡張したようなものである。「ちょっと暮らし」の平均滞在日数が 2009 年度は 24.6 日であったが、シーズンステイはその名の通り、夏や冬のある一時期だけを北海道で過ごすスタイルである。二地域居住は、「住み慣れた家を手放すことなく、新たに北海道に第 2 の暮らしの場をつくる」ことであり（北海道総合政策部地域づくり支援局 2009）、平日はもとの住まいで過ごし、週末だけ北海道で過ごすなど、頻繁な行き来を行うスタイルである¹⁶。そして、最終的に④完全移住がある。すなわち、「ちょっと暮らし」から「完全移住」までに、少しずつ形式の異なる移住があり、それは滞在期間の微妙な差によって区別されるが、それはまるで、色の濃淡のように移住の形式がグラデーションになっている。

では、完全移住ではない「ちょっと暮らし」や二地域居住というスタイルで北海道に暮らす人びとは、その地域でどのように位置づけられていくのか。ここでは、北海道移住促

¹⁴ くらすべ北海道ホームページ「北海道生活体験ちょっと暮らし」パンフレット web 版。（2012 年 1 月 23 日取得）http://www.kurasube.com/krsb_top.php?MENU=26。また、2011 年 9 月には、東京恵比寿で北海道暮らしフェアが開かれた。

¹⁵ 『北海道新聞』web 版 2011 年 12 月 4 日「体験移住事業『ちょっと暮らし』道内の利用者数は前年比 32%増 道まとめ」

¹⁶ 二地域居住は北海道独自の政策というわけではなく、全国的に展開されているものである。1990 年代以降、農業や林業への就業志向の高まりから、全国農業会議所や全国森林組合連合会が就業相談会や就業体験ツアーを行っている現状を踏まえ、愛媛大学農学部の研究チームでは、農山村への居住を促進させる方法を検討している（藤井他 2009）。就農フェアや林業見学・交流ツアーに参加した人たちを対象に、「空き家」の利用についてや、二地域居住の可能性が調査されている。二地域居住予定者の典型は 20 歳代と 50 歳代で、後者は「子育てが終わり余生を楽しむ方法の一つとして二地域居住が選択されている」とまとめられている（藤井他 2009: 96）。

進協議会が発行している『北海道移住案内 2011「ちょっと暮らし」ガイド』に掲載された、Aさん夫妻（60代）を取り上げよう（北海道移住促進協議会 2011: 14-5）。名古屋で教員として働いていたAさん夫妻は、夫が定年を迎える1年前に早期退職し、名古屋から北海道浦河町へ移り住んだ。もともと馬に興味があり、乗馬雑誌に掲載されていたサラブレットの聖地である浦河町への移住体験案内を見つけ、1ヶ月間の移住体験（ちょっと暮らし）に申し込む。そして、その体験の数ヶ月後に移住を決めている。Aさん夫妻の住まい方の特徴は、1年のうち約10ヶ月を北海道の浦河町で過ごし、夏と冬の1ヶ月ずつを自宅のある名古屋で過ごすということである。北海道で過ごすときは、主に趣味の乗馬に時間を使うが、地域の町内会や婦人会にも所属し、地元小学校の交通安全指導にあたりたり、町内のお年寄りが乗馬をするためのボランティアスタッフとして働いている。

このようなAさん夫妻は、どのような「よそ者」としてとらえることができるか検討しよう。1年のうち約10ヶ月を浦河町で暮らし、残りの2ヶ月を名古屋で過ごすという生活には、赤坂の〈異人〉の類型における②「定住民でありつつ一時的に他集団を訪れる」来訪者と、③「永続的な定着を志向する」移住者の両方の性質を見出すことができる。浦河町で暮らす期間が、名古屋で暮らすそれよりも長期ではあるが、長年過ごしてきた名古屋の家を残しながら、約10ヶ月を浦河町で暮らすという生活スタイルは、まさしく②来訪者と③移住者の両方の性質を引き受けている。ジンメルは、異郷人を「今日訪れて明日もとどまる者」と定義した。Aさん夫妻の場合、ある一時期は「明日もとどまる」が、また別の時期が来ると「去る」ことになり、約1ヶ月は浦河町に戻らないことになる。すなわち、以下の図2のように、シーズンステイや二地域居住は、赤坂の図式による②来訪者と同様の動線を描くが（A・B）、浦河町に滞在する約10ヶ月は③移住者であり、その生活の内容からも完全移住を選択する移住者とほぼ同じ存在となるのである（C）。

以上、2000年以降の「新しい移住」を担う一部の北海道への移住者は、赤坂の〈異人〉の類型における来訪者と移住者という二つの側面を帯びているのである。

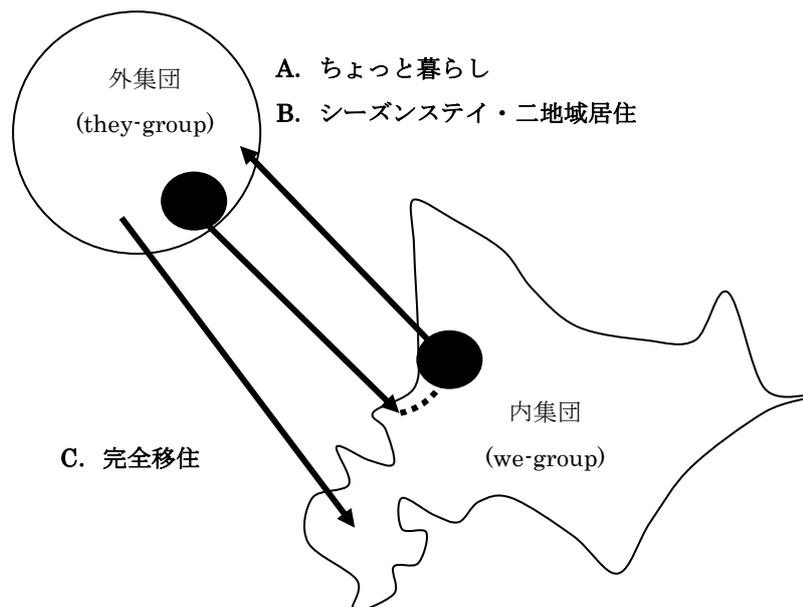


図2 「北海道移住」における移住者の類型（赤坂 1992 をもとに筆者作成）

4. 新参者でもあり、マージナルマンでもあること

前章で取り上げた北海道における移住政策は、2000年代の半ばに盛んになったが、本章で取り上げる沖縄への移住は、1990年代後半からすでに話題となっていた。それは、ちょうど沖縄の文化や風土が沖縄県外から注目され、次々と消費されていった沖縄ブームの時期だからである¹⁷。この沖縄ブームを背景にして、「沖縄へ移り住みたい」と考える沖縄県外出身者が続出し、「沖縄移住」という用語が登場した。このような状況下で沖縄へ移り住む移住者たちは、沖縄ブームを再生産するような楽天的な存在として描かれることがしばしばである。しかし、移住者は移り住んだ沖縄の集落において、その地域を存続するための重要な存在になり、年中行事等の重要な担い手となっていくことも事実である。多田治は、八重山諸島での調査において、伝統行事の継承という点、また環境問題への発言という点において、移住者の存在が離島などに欠かせなくなっていると述べている(多田 2008: 239-42)。すなわち、「新しい移住」としてとらえられる「沖縄移住」は、ただ楽天的な移住者を生み出しただけでなく、移住先の集落で移住者が貴重な人材としてとらえられるケースがあるということである。本章で取り上げるのは、多田が指摘しているような地域に欠かせない存在となっていく沖縄への移住者が、その一方でマージナルマンとして扱われるという事例である。

(1) 新参者としての移住者

Gさん(30代、関東地方生まれ、男性)とHさん(30代、北海道生まれ、女性)夫妻は、2003年に沖縄へ移住し、調査時の2008年7月には沖縄県北部今帰仁村に居住していた。移住した当初から、Gさんはハウス農家を掛け持ちし、時には草刈りや墓の掃除を手伝うという日々を送っていた。Hさんは今帰仁村のデイケアサービスでヘルパーの仕事をしていた時期があったが、調査時は主婦であった。子どもは3人である。本節では、Gさん夫妻が地域の新参者として包摂されていく様子を取り上げる¹⁸。

¹⁷ 岩淵功一は、1990年代以降の「沖縄ブーム」を、「沖縄の基地問題や歴史問題についてではなく、音楽・食・ツーリズム・生き方などが主流メディアによってもてはやされる、ポピュラー文化・消費文化における」ブームである、と述べている(岩淵 2004: 10)。これまでにも、沖縄の文化や風土が注目されるという動きはすでにあった。戦前には、柳田國男や折口信夫、柳宗悦など民俗学者による南島研究がさかんであり、沖縄を訪れた学者たちが、沖縄の民芸や風俗を熱心に記述している(日本民芸協会 1939)。また、沖縄の本土復帰以後の1975年には沖縄海洋博が開催されたことで「沖縄イメージ」が確立し、沖縄を訪れる観光客や沖縄文化の大衆的な消費が「沖縄イメージ」と密接に結びついて進行していく(多田 2004)。しかし、岩淵が述べているように、1990年代以降の「沖縄ブーム」は、よりポピュラー文化や消費文化に特化した現象として立ち現れる。それによって、沖縄における基地問題や歴史的な問題が不問に付され、沖縄と本土の間の溝は逆に深まった、という見方もある(新崎 2005: 214)。

¹⁸ 筆者はインタビューのインフォーマント(調査対象者)に対して、インタビューで得られた個人情報の取り扱いに関する資料(「インタビュー調査のお願いとお約束」)を作成し、調査を行う前に配布している。その中で、修士論文のほかに研究会や学会でインタビューのデータを使用し、分析した結果を発表させていただく場合があることへの同意を得ている。

Gさん夫妻は、今帰仁村に移り住んだ当初から、字における行事や催し物の多さに驚いている。例えば、運動会が年に4回あり、開催されるごとに出席する必要があるという。しかし、それらの行事に参加することで、字の地元住民との交流を大事にしてきた。それは、「内地から来てる人」とは意図的に「会わないようにしていた」ほどである¹⁹。

【4-1】

G：島のおじさんとか普段しゃべってない。会う人いないもん。(中略)(今は)色々、他の内地から来てる人とか、そのう、宿関係の方とかちょこちょこ、やっつかないと、と思ってやってたけど。それまでもう、まず地元できちんと、ある程度、と思って。なるべく逆に、あんまり会わないようにしてたっていうか、ていうのもちょっとあったかも。

H：本土の人とはね。なんていうの、ナイチャー同士の付き合いじゃなくて、地元で溶け込んでから、私たちのやりたいことがもう少しだから、それまではもうちょっと、我慢しとこうかなあ、ていうか。我慢でもないんだけど。忙しすぎてそれどころじゃない(笑)。行事を一個一個やってくただけでもう大変だから。草刈りだ、なんだって。あのう、ここの字の草刈り、婦人会の草刈りとか、なんかねえ(笑)、なんかもう、バタバタと土日がつぶれていくから。もう、家族で過ごすっていうのが、ちょっと少ないような・・・。

GさんとHさんは、今帰仁村に来た当初から地元で溶け込むことに徹することで、「ナイチャー同士の付き合い」を意識的に回避していたことが上記の語りからわかる。Gさんにおいては、「不本意」だと思いつつも、ハウス農家を掛け持ちし、時には草刈りや墓の掃除を手伝ってきた。つまり、集落でできる仕事はなんでも引き受けてきたのである。

【4-2】

*：あのう、そういうのってやっぱり、(豊年祭の)踊りとかは出たりとかされるって言ってましたよね？

H：うん。出た出た。

*：なんか普段から、例えば、沖縄っていうか地元にある踊りとか、そういうのって、練習する機会とか、普段からはあるんですか？

H：普段、普段じゃなくて、なんかの催しがあるから、婦人会で出ましよう、「出ましようイコール強制」みたいな(笑)。

G：あと区長歓迎会があったり、催し物で、踊りましよう。「はい、その辺のナイチャー、はい、引っ張ってきて」とか(笑)。

H：絶対こっちの、ナイチャーの方が、何て言うの？従順っていうか、やらなきゃいけない。

G：立場が弱いし、俺、うちなんかこんな(家)家賃タダで借りてるから、はっき

¹⁹ インタビューデータの表記は、桜井・小林編(2005)を参考にしている。「G」や「H」は語り手、「*」は聞き手(調査者・筆者)を示す。

り言ってうち追い出されちゃっておかしくないような状態だから、言うこと聞かなくやいけない。はい、はい、みたいな。

H：ホントに、ね。たぶんそれができない人は、たぶん出てくと思うの。だからなんとかやってるから、なんとか住めてるわけよ。

GさんとHさんは、日頃から地域での行事や催し物が多く、「パタパタと土日がつぶれていく」と述べながらも（【4-1】）、その行事の一つ一つを必死にこなしてきた様子がわかる。それは、「ナイチャーの方が従順」であり、家を無料で借りているからだけではない。先ほど、「内地から来てる人」とは意図的に「会わないようにしていた」ことを取り上げたが、地域の成員となるために、Gさん夫妻は並ならぬ努力をしているのである。そして、行事や催し物への参加を「自然に」求められるGさんたちは、集落の「新参者」として認められているのではないか。すなわち、地域の成員として、Gさん夫妻は集落の内部に包摂されているのである。

（2）マージナルマンとしての移住者

地域の成員である「新参者」として、集落の内部に包摂されていくGさん夫妻であるが、生活のさまざまな場面において、よそ者であることを自覚しないことはないという。例えば、地域住民の血縁関係や地縁関係の強さを意識しながら以下のように述べている。

【4-3】

H：うちはA小学校だけどさ、（保護者も）みんな同級生っていうのがすごい強いよね。同級生同士の仲間意識みたいなのが、とっても強いから、その人たち同士で幼馴染で飲む、感覚なんだよね、一緒に。だから、もう生まれ育って、ずーっと一緒だから、で、私たちがボンって入ったって、わけわかんない（笑）。しかも言葉がよくわかんないし（笑）。

G：（（中略））こう、あんまりパッと入ってきて、まあ一応ね。あのう、でも（子どもたちは学校で）結構良く、仲良くね、付き合ってもらってるなあ、とは思うんだけど。あんまり最初から、あのう、突飛なことやると一、やっぱり、ねえ、なんか・・・。

H：宇宙人だから、私たち。

G：うーん。だからなるべく、俺もこう、みんなと同じようなことを最初はやろうかなあっていうのは、ちょっと心がけて、うーん。

Gさん夫妻は、子どもの学校行事などで保護者と集まる機会が多いが、その保護者がもともと今帰仁村で生まれ育った人たちばかりであることで、その中に「私たちがボンって入ったって、わけわかんない」と語られている。「宇宙人だから、私たち」とHさんが表現するように、字では「突飛なこと」をすることはためらわれ、「みんなと同じようなこと」をGさんは移住当初から行ってきたのである。

【4-4】

H：だから、引っ越ししてくる人っていう状態で私たちを見てるのか、もっとそれよ

りもすごい、ホントに宇宙人的な（感じでみてるのか）。私たちだったらさ。どっからか転勤してきた、転勤という形で、あっち（本土）だったらとるじゃない？こっちだと、転勤じゃなくってね、移住っていう形になるから、その言葉の重みが違うよね、転勤と移住ってものの。

G：（（中略））まあ、でも島の人たちも、な一にしにこっち来んの？みたいなのは、そういう感じはやっぱ、あるんじゃないの？

前節では、Gさんたちが集落内での行事や催し物への参加を「自然に」求められることで、集落の「新参者」として認められていると述べた（【4-2】）。しかし、Hさんは集落における自分たちの存在を「宇宙人」や「宇宙人的」と表現し、Gさんは「島の人たちも、な一にしにこっち来んの？」というまなざしを向けているのではないかと述べる。それは、自分自身を常に「よそ者」として自覚するということへとつながっている。

【4-5】

*：地元の方との色々付き合いの中で、県外から来たっていうことに対して、（（中略））そういう経験（「ナイチャー」という認識をされたこと）とかは？

G：いやもう常にもうよそ者だって思いながら生活してる。

H：じゃないと、なんかね。もう、こっちが。

G：一步引かないと、引いて、うん。

H：自分からガガガッと言うんじゃないで、一步も二歩ぐらい引いて、「バカですよ～ん」みたいな感じでやってた方が、入りやすいし。で、面倒も見てくれるのは、本当に面倒も見てくれるから。

G：うん、うん。そういう方が、「もうバカでなんにもわかんないんでお願いしまーす！」みたいな、ホント、そういう感じの方が。うん。

H：の方が、いいんじゃないかな～と。もし入ってきてね、ここで生活しようって思うんだったら、その方が、楽ではあるよね。私はそうだったけど。だから、字の豊年祭の踊りにも出たりとか。

Gさんは、「常にもうよそ者だって思いながら生活してる」と述べ、「一步引かないと」と述べている。彼らが地域に溶け込むことを心がけ、「突飛なことをやらない」ということを信条にしていたことはすでに述べたが（【4-4】）、それが「一步も二歩ぐらい引」という二人の徹底した態度に表れているといえよう。すなわち、行事や催し物への参加によって、Gさんたちを地域の成員としてみなすことができる一方で、「突飛なこと」をためらうことや、地域住民との距離の取り方を常に意識している態度に、マージナルマンという「よそ者」の姿をみる。Gさんたちが、自分たちを常に「よそ者」としてとらえながら生活をしているのはそのためであろう。

以上、地域の行事や催し物に積極的にかかわることができる一方で、マージナルマンという位置づけを与えられた沖縄の移住者を取り上げた。この二重性は、3章で取り上げた北海道の移住者の二重性とは水準が異なる。すなわち、北海道の場合は「留まるか否か」という水準において、沖縄の場合は「成員になるか否か」という水準においてそれぞれ両

側面を引き受けるような存在であったといえる。このような両義性をかかえた移住者が、「新しい移住」を担っているのである。

5. 結論

本稿は、従来のよそ者概念を参照し、「新しい移住」を担う主体がどのような存在であるかを検討した。

2000年以降、さまざまな移住支援や移住政策に取り組んできた北海道の事例では、「ちょっと暮らし」やシーズステイ、二地域居住を行った人びとが、来訪者と移住者の両方の性質を併せ持っていたことが明らかとなった。すなわち、短期的にあるいは長期的に、また、ごく稀にあるいは頻繁に、北海道との行き来を行うような移住のスタイルは、移住者が北海道という空間に「留まるか否か」という二重性を引き受けることを要求する。また、過疎化が進む集落で暮らす沖縄のGさんたちの事例では、行事や催し物への積極的でなかば強制的な参加によって、Gさんたちを地域の成員としてみなすことができた。その一方で、Hさんが自らを「宇宙人」と形容することや、「突飛なこと」をためらうこと、また地域住民との距離の取り方を常に意識していることが明らかになり、このような態度は、Gさんたちが移住先の集落あるいは沖縄社会においてマージナルマンであることを示している。

以上、「新しい移住」を担う移住者を、これまで議論されてきたよそ者概念からとらえ直すと、北海道への移住は「留まるか否か」という水準から、沖縄への移住は「成員になるか否か」という水準から、それぞれ移住者を特徴づけることができる。もちろん、後者の沖縄への移住者にみられたような、地域に包摂されながらもある部分においてはマージナルな空間においやられてしまうよそ者はこれまでも存在した。また、本稿で取り上げた「新しい移住」を担う主体は二例だけであるため、「新しい移住」を担うような、より多様な主体に今回の「よそ者」の特徴を直接当てはめることはできない。しかし、来訪者と移住者の両方の性質を同時に帯びるような移住者の出現と、地域に欠かせない存在となりながらもマージナルマンとして立ちすくむことになる移住者の存在が、これまでの日本にはなかった形式の移住をもたらしていることを示している。すなわち、移住政策を利用することで可能となる移住や、過疎地域の活性化や再生にかかわる移住の出現である。これを、「新しい移住」としてとらえることで、これからの地方の行く末を模索することができるのではないか。今後、「新しい移住」として取り上げられるさまざまな移住のあり方に言及しながら、ますます変わりゆく移住の形式を検討していきたい。

【文献】

- 赤坂憲雄，1992，『異人論序説』筑摩書房。
- 秋津元輝，2002，「多様化する農業者のかたち」，榎瀧俊子・松村和則編，『食・農・からだの社会学』新曜社。
- 秋山道宏，2009，『移住ブーム』『観光ブーム』から見える地域・住まい方の変容」，多田治編，『2008年度 一橋大学多田治ゼミナール 沖縄・八重山調査報告書 第2巻 観光と環境、文化と自然の社会学～沖縄・八重山諸島のフィールドワークから～』（2009

- 年 8 月版) (タダオサム・ダイアリー <http://d.hatena.ne.jp/tada8/>よりダウンロード) .
 新崎盛暉, 2005, 『新版 沖縄現代史』岩波書店.
- 藤井多起・岡田麻由・藤原三夫, 2009, 「農山村移住・農林業就業希望者の属性意向」『林業経済研究』55(1), 87-98, 林業経済学会.
- 岩淵功一・多田治・田仲康博編, 2004, 『沖縄に立ちすくむー大学を越えて深化する知』せりか書房.
- 桑原真人, 1985, 「第 1 章 屯田兵制度」, 札幌市教育委員会編, 『さっぽろ文庫 33 屯田兵』北海道新聞社.
- 中村英重, 1998, 『北海道移住の軌跡ー移住史への旅』高志書院.
- 日本民芸協会編, 1939, 『月刊民藝』第 8 号 (11 月号), 日本民芸協会.
- 桜井厚・小林多寿子編, 2005, 『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房.
- 佐藤郁哉, 2006, 『フィールドワーク増訂版 書を持って街へ出よう』新曜社.
- Sato, Machiko, 2001, *Farewell to Nippon: Japanese Lifestyle Migrants in Australia*, Melbourne: Trans Pacific Press.
- Schutz, Alfred, 1964, *Collected Papers II, Studies in Social Theory*, edited and introduced by Arvid Brodersen. (=1980, 中野卓・桜井厚訳, 『現象学的社会学の応用』御茶の水書房.)
- 島村麻里, 2007, 「アジアへ向かう女たち 日本からの観光」『アジア遊学』104: 92-106, 勉誠出版.
- Simmel, Georg, 1908, *Soziologie : Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Duncker & Humblot, Berlin. (=1994, 居安正訳, 『社会学 社会化の諸形式についての研究 (下)』, 白水社.)
- 須藤直子, 2009, 「『沖縄に移り住む』ことの現在ー生き方の問い直しと『沖縄移住』ー」平成 20 年度琉球大学大学院人文社会科学科修士論文.
- , 2011, 「新しい『移住』のかたち——1990 年代以降の沖縄への移住を事例として——」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』56 第一分冊: 63-80, 早稲田大学大学院文学研究科.
- 菅康弘, 2001, 「I ターン定住ー<住>から<旅住>へー」『農業と経済』67(7), 68-73, 富民協会.
- , 2006, 「よそ者であることを<選択>するー居住地選択と愛着の位相ー」『甲南大学紀要 文学編』146, 1-19, 甲南大学.
- 多田治, 2004, 『沖縄イメージの誕生ー青い海のカルチュラルスタディーズ』東洋経済新報社.
- , 2008, 『沖縄イメージを旅するー柳田國男から移住ブームまで』中央公論新社.
- 地域自立応援施策研究会編, 2011, 『都市から地方へ移住者・受入者のための移住・交流ハンドブック』ぎょうせい.
- 山下晋司, 1996, 「<南>へーバリ観光のなかの日本人ー」, 青木保他編, 『岩波講座文化人類学 7 卷 移動の民族誌』岩波書店.
- , 2007, 「出ようかニッポン、行こうかニッポン 現代日本をめぐる国際移動」『アジア遊学』104: 4-11, 勉誠出版.

- 安井眞奈美, 2000, 「消費される『ふるさと』」 成田龍一・藤井淑禎・安井眞奈美・内田隆三・岩田重則, 『故郷の喪失と再生』 青弓社: 91-132.
- 吉原直樹, 2008, 『モビリティと場所 21世紀都市空間の転回』, 東京大学出版会